

草地の環境

身近な草地としてすぐに思いつくのは、都市公園やゴルフ場などでみられる芝生かもしれませんが、これらは全くの人工的な環境なので、あまり生きものは多くありません。

農村へ行くと、水田の畦、ため池の堤や周囲、道ばた、耕作跡地などで、雑草が生い茂った草地があちこちで見られます。住宅地でも、空き地のまま放置された所に雑草が育っています。これらの草地は、いずれも規模の小さなものですが、もっと規模の大きなものは、淀川や大和川などの河川敷、和泉市の信太山、河内長野市の岩湧山山頂付近へ行けばみることができます。

河川敷の大きな草地

もともと暖かくて雨の多い日本の気候では、草地環境が維持されにくいいため、多くの草地はかなり人の手が入って維持されているといえます。

例えば、農作地の畦や空き地、池の堤などは、定期的に草刈りを行うことによって草地が維持されています。草刈りを行わずに放置すると、2～3年でセイタカアワダチソウなど背の高い植物が繁茂します。そしてアカメガシワやヌルデ、ハゼノキなどの明るい環境でよく生育する木が徐々に生え、しだいにコナラなどの林に変わっていくと考えられています（P. 20参照）。つまり、今みられる多くの草地は、植物の遷移の途中段階にある環境といえます。

ところが、河川敷では時々川の増水によって地面が洗われるため、ヤナギ類などを除いて、大きな木が育ちにくい条件下にあります。その結果、草地はいつまでも草地として残っていきます。河川敷の草地は、人の手を借りなくても自然に維持される特殊な環境ともいえます。

広い河川敷の草地には、ミコシガヤやミゾコウジュ、カワラニンジン、オギ、ヤナギタデ、カワラヨモギなどの特徴のある植物が生育し、セアカオサムシやヒゲコガネ、キアゲハ、ツマグロヒヨウモン、ヒメアカタテハなどの昆虫がみられます。ヒバリやチョウゲンボウ、コミミズクなどの鳥たちもいます。



102. ヒゲコガネ



103. オギ



104. キアゲハ



105. ヒバリ



106. チョウゲンボウ



107. ヒメアカタテハ

農作地などの小さな草地

水田や畑あぜの畦つつみ、ため池の堤など、定期的に草刈りがされている草地には、キキョウ、リンドウ、ツリガネニンジンやセンブリ、オミナエシ、フジバカマ、カンサイタンポポなど、昔から日本にあった植物ざいらいしゆ（在来種）がみられます。草刈りが行われずほうちに放置されると、ススキなど背の高い植物や、セイタカアワダチソウなど繁殖力の強い外国から入ってきた植物き かしよくぶつ（帰化植物）が繁茂してしまい、在来種ざいらいしゆや繁殖力の弱い植物はんしよくりよくはみられなくなります。

草地の代表的な昆虫であるバッタやキリギリス類は、草地の状態（植物の背の高さや地面の湿り具合など）によって、すみ分けをしています。草がまばらにしか生えておらずらち裸地に近いような草地では、トノサマバッタやクルマバッタモドキ、イボバッタなどがたくさんみられますが、草が少し多くなるとショウリヨウバッタやオンブバッタ、ホシササキなどがみられるようになります。草の背丈せたけがもっと高くなると、オナガササキやショウリヨウバッタモドキ、キリギリス、クツワムシなどの大型の種類がみられます。

昆虫以外では、セッカやホオジロ、キジなどの鳥や、草の上に巣をつくるカヤネズミなどがみられます。



108. 農作地の小さな草地



草
地

109	110	111
112	113	114
	115	116
	117	118

109. キキョウ 110. リンドウ
 111. ススキ 112. セッカ
 113. ショウリョウバッタモドキ
 114. ショウリョウバッタ
 115. トノサマバッタ
 116. ホオジロ
 117. カヤネズミの巣
 118. クツムシ